

# 小倉山古墳測量調査報告書

2012年3月

高知大学人文学部考古学研究室



# 小倉山古墳測量調査報告書

2012年3月

高知大学人文学部考古学研究室



## 例　言

---

- 1 本書は高知県香美市土佐山田町楠目字小倉山に所在する小倉山古墳の測量調査報告である。
- 2 本調査は、高知大学人文学部人間文化学科考古学研究室が主体となって調査を実施した。調査は、清家章（人文学部教授）が担当した。
- 3 本調査は日本学術振興会科学研究費基盤研究（C）「横穴式石室導入にみる南四国と瀬戸内の交流と古墳展開の研究」の一部を使用して実施した。
- 4 調査期間は2011年8月25日から9月8日である。
- 5 挿図のうち、図1・2・5・8の方位は真北を示し、図6・7の方位は磁北である。標高は海拔を示す。
- 6 調査には高知大学人文学部考古学ゼミ生・人文学部1・2年生ならびに京都大学大学院文学研究科大学院生が参加した。参加者は以下のとおりである。山本亮（京都大学大学院）・藤井雅大・大江景子・国沢知香・野口真未・又吉幸嗣・清水春花・平尾英希・西垣克哉・中原朋美・松浦祐樹（以上、高知大学学生）。整理作業には上記の多くの学生が参加したが、とくに大江・野口・又吉・平尾が主力を担った。
- 7 写真的撮影は清家と山本が担当した。
- 8 調査の実施にあたり、地権者・地元自治会・香美市教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センターより多大な協力をいただいた。
- 9 石室の左右は、玄室奥壁から羨道を見た場合の方向を指す。
- 10 本書の執筆は、清家・桥家豊・山本が担当した。分担は文末に示した。
- 11 本書の編集は清家が担当した。

## 目 次

---

第Ⅰ章 調査経過	1
1 周辺の遺跡	1
2 調査の経緯と経過	3
3 謝辞	4
第Ⅱ章 調査成果	5
1 古墳の立地	5
2 墳丘測量の成果	5
3 石室実測の成果	7
第Ⅲ章 まとめ	11

## 図版目次

### 図版

- 1 1 古墳の立地
- 2 墳丘（東から）
- 2 1 墳丘（南から）
- 2 石室入口
- 3 1 玄室奥壁
- 2 玄門
- 4 1 右側壁
- 2 左側壁

## 挿図目次

---

図1 古墳の位置（平尾製図）	1
図2 周辺の主な古墳（又吉製図）	2
図3 作業風景	3
図4 調査中の1コマ	3
図5 古墳の立地（又吉製図）	5
図6 墳丘測量図（野口製図）	6
図7 石室実測図（大江製図）	9～10
図8 特大型・大型石室の分布と小倉山古墳（清家製図）	11

# 第Ⅰ章 調査経過

## 1 周辺の遺跡

小倉山古墳は高知県香美市土佐山田町楠目字小倉山に所在する。香美市土佐山田町は南国市及び高知市から見て北東方向にあたり、現在においても香川県・徳島県方面に向かう上での重要な交通ルートとなっている。現在の土佐山田町の中心街は高知平野北東部、物部川によって形成された河岸段丘上に位置し、この河岸段丘の北に四国山地が広がる。その四国山地から連なる小丘陵上に小倉山古墳はある。

土佐には、古墳時代前半期に属する古墳は極めて少なく、また明確な前方後円墳も未だ確認されていない。前半期にさかのぼる可能性を持つ古墳は、幡多地域には宿毛市高岡山古墳群と宿毛市曾我山古墳、高知平野には南国市長畠2号墳と南国市狭間古墳などがわずかにあるのみであり、よって、土佐の古墳のほとんどは横穴式石室を内包する後・終末期古墳である。

高知平野においては南国市を中心とする高知平野東部地域に主に古墳が分布する（図2）。高知平野において最も古い横穴式石室を有する古墳は南国市に所在する長畠4号墳であり、TK10型式期の須恵器を出土している。その後、南国市には蒲原山東古墳群、高知市には高間原古墳群などが続いて造営され、TK43型式期には県内唯一の埴輪を持つ伏原大塚古墳が香美市に築造された。

TK209型式期を中心に高知平野の北東部に広がる丘陵上に多くの横穴式石室墳が造られる。南国市においては高知県最大規模の古墳群である舟岩古墳群や、土佐三大石室のひとつである小蓮古墳などがその代表として挙げられるが、この時期には土佐山田町においても大規模な横穴式石室と金銅装の馬具などをもつ新改横走古墳をはじめとして上改田古墳、前行山古墳群など、比較的多くの横穴式石室墳が造営される。

小倉山古墳周辺にしぼってみると先述した伏原大塚古墳が小倉山古墳の南側400mに存在するほか、南西すぐく鏡野学園古墳、西側700mには大元神社古墳と前行山古墳群が存在する。

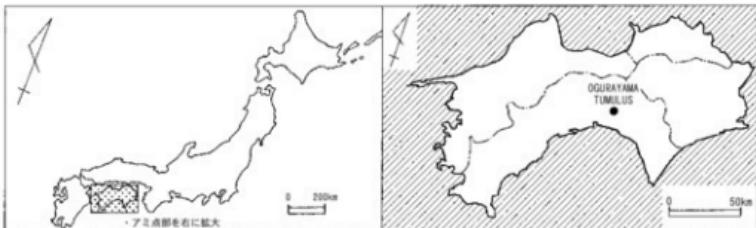


図1 古墳の位置

## 2 周辺の遺跡



図2 周辺の主な古墳

また、小倉山古墳と伏原大塚古墳の間には、伏原遺跡・ひびのきサウジ遺跡・ひびのき岡ノ神母遺跡、弥生時代後期から古墳時代初頭の土器であるひびのき式の標識名となったひびのき遺跡が存在する。近年、高知山田線にともなう発掘調査で伏原遺跡などから弥生時代後期の集落とともに古墳時代後期から終末期の集落も検出された。上述した周辺の古墳との関連が問われるところである。

(耕家・清家)

## 2 調査の経緯と経過

**調査の経緯** 昨年度、高知大学考古学研究室では、科学研究費「横穴式石室導入にみる南四国と瀬戸内の交流と古墳展開の研究」の一環として南国市坂ノ松古墳の墳丘測量・石室実測調査を実施し、その成果を公表したところであった（高知大学2011）。その整理過程において、坂ノ松古墳の横穴式石室とほぼ同形・同大で石積みもきわめて類似した横穴式石室図面が存在することに気づいたのであった。それらは『土佐山田町史』にある本古墳図面と『高知県史』掲載の南国市丸山古墳である。これらの図面は、坂ノ松古墳の石室実測図がなんらかの事情によって取り違えられて掲載された可能性が考えられた。このうち丸山古墳は、坂ノ松古墳と同じ丘陵上の近接した位置にあったとされるものの現在その位置が不明であり、石室図面が正しいかどうかは現段階で確認することはできない。近接した古墳であるので、石室構造が類似していた可能性も十分考えられることである。今後の課題として丸山古墳の再発見に努めてその是非を確かめることにしたい。小倉山古墳については、現地確認をしたところ、町史掲載の図面は、実際の石室と全く異なることが判明した。坂ノ松古墳の石室図面が小倉山古墳のものと誤解されて掲載されたと考える。

小倉山古墳の現地踏査を行う中で、本古墳の袖部形状などが、昨年度の科学研究費によって調査をした坂ノ松古墳や明見彦山1号墳と部分的に類似し、比較対象として重要と考えられた。また、正しい図面を公開することは文化財行政や地域における教育にも重要と考えて本古墳を調査対象として選択したのであった。

**調査経過** 調査は2011年8月25日から開始し、同年9月8日に終了した。調査チームを墳丘班



図3 作業風景



図4 調査中の1コマ

#### 4 調査の経緯と経過

と石室班に分け、墳丘班は清家が石室班は山本が指導し、全体を清家が統括した。

石室内は過去に人が住んだような形跡があり、空き缶やガラス瓶が多数転がっており、毛布なども残されていた。石室班はまずこれらの掃除から始めた。この作業と並行して、墳丘班は閉合トラバースを設定し、レベル移動を行った。その後、石室班は実測のための基準線を設定し、10分の1スケールの実測図を作成した。高い湿度と害虫に苦しめられながらの作業であつたが、学生の努力により石室図面は完成した。墳丘班はさらに2班に分かれ、平板をもちいて100分の1墳丘測量図を作成した。

(清家)

#### 3 謝 辞

本調査を遂行するに当たり、地権者の方には古墳の調査を快諾していただき、地元自治会にはさまざまな援助をいただいた。香美市教育委員会には、地元との交渉など作業の円滑化に関してさまざまな援助を賜った。高知県文化財団埋蔵文化財センターは機材を貸与された。以上のようなご協力を得て、本調査は遂行することができた。お世話になった皆様方に心よりお礼を申し上げたい。

(清家)

#### 参考文献

岡本健児 1968『高知県史』考古編 高知県、高知

高知大学人文学部考古学研究室編 2011『板ノ松古墳測量調査報告書』高知大学考古学調査研究報告第9冊、

高知大学人文学部考古学研究室、高知

土佐山田町史編纂委員会編 1979『土佐山田町史』土佐山田町教育委員会、高知

## 第Ⅱ章 調査成果

### 1 古墳の立地

香美市グラウンドと香美市立鏡野中学校に挟まれた東西の道を西に行くとJR土讃線の高架線路に至る(図5)。JR高架線のすぐ東側にある山塊南斜面に小倉山古墳は存在する。JR高架線の東側に山塊へ上の階段とスロープがあり、それを登ったところにある墓地の西側藪中、線路のすぐそばに古墳は存在する。現状では付近に看板や古墳の所在を示す矢印などがないため、古墳にたどり着くのはやや困難な状況である。古墳からは南側の土佐山田の町並みと西側の楠目の集落を見通すことができ、眺望は優れている。

(清家)

### 2 墳丘測量の成果

閉合トラバースを組んだ上で平板にて地形図を作成した(図6)。先述のとおり古墳は山塊の南斜面にあるが、古墳の存する場所は傾斜が緩やかで狭いながらも平坦地となっている。古墳の北側には山塊の斜面があって頂上へ続き、南側は下りの斜面があったはずであるが、道路の

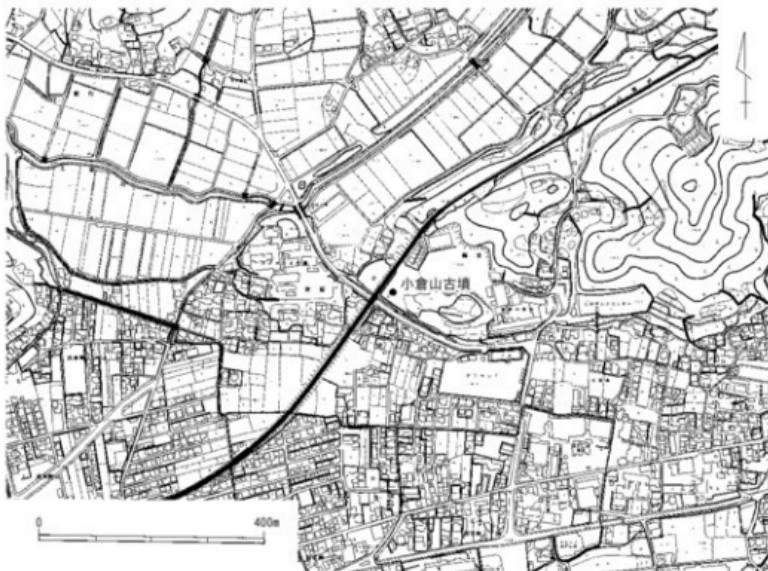


図5 古墳の立地

## 6 墳丘測量の成果

擁壁のため削平を被っている。古墳の西側は、JRの線路が走り丘陵は断ち切られている。さらに古墳の南西部は近世以降の墓地に用いられたと考えられる石壇構築のため大きく削平されている。墳丘の北東側には直径2.5mの大きな穴が掘削されている<sup>(1)</sup>。このように人為的改変を受けていないのは墳丘の東側と北側から北西部ということになる。

マウンドは横穴式石室を中心とし長軸10m・短軸7.5mの隅丸の長方形形状に残っている。しかしながら、本古墳を方墳と考えることはできない。墳丘北西部には、標高61.750mから62.750mまでの北へ入り込む谷地形が観察される。同じく墳丘東側においても南東部から北部へ緩やかな谷地形が観察される。本古墳は北東から南西に向かって下る傾斜面途上にあるので、これらの谷地形の存在はきわめて不自然である。おそらく古墳を区画する周溝や掘り割りなどの痕跡である可能性が高い。この2つの谷地形はともに弧状を呈していることから円墳である可能性が高い。

墳丘規模はさらに情報が少なく確たることは言えないが、今ある情報をつなぎ合わせて推測してみる。横穴式石室墳は、石室の奥壁あるいは玄室の中央部が墳丘の中心になることがある。本古墳の場合、奥壁は現状で墳丘の北側に偏っているように見える。そこで玄室中央部を円の

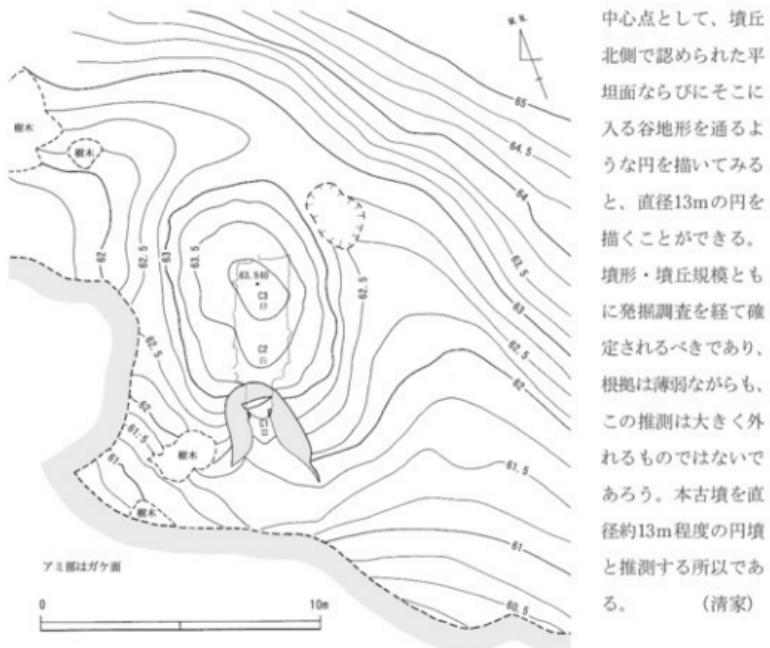


図6 墳丘測量図

### 3 石室実測の成果

小倉山古墳の埋葬施設は両袖式の横穴式石室である(図7)。羨道は、玄室の主軸に沿ってやや西寄りに玄室に取りつき、S-18° 20' 22"-W(磁北)に開口する。床面は、羨道からの土砂の流入と擾乱により本来の姿を示していないが、現状で石室の規模は全長5.96m・玄室長4.49m・玄室幅1.86m(奥壁付近)・1.60m(玄門付近)・玄室高2.40m(奥壁付近)である。石材はいずれも秩父帯から産出する変性チャート・砂岩類であると考えられる。石材は一部にきわめて平滑な面を石室内に向けて設置するものを含むが、多くは玄室内を向く面が歪であり、加工がなされていないか顯著でないと考えられる。

まず玄室についてみてみよう。

玄室床面の平面形については、先述のとおり本来の姿そのものではないが、現状を述べる。玄室床面は奥壁付近の平面形がやや歪になるが、これは両側壁の基底石を奥壁に向かって主軸からやや東に振る形で設置するのに対し、奥壁の石材をわずかに主軸から西に振る形で置くためである。そののち両側壁は直線的にはほぼ平行に玄門方向へ伸びるが、左側壁のもっとも玄門寄りの基底石のみ、奥壁に向かって主軸からやや東に振れる。これは羨道がやや西寄りに取りつくことに対応するものと考えられる。

床面には、奥壁から羨道方向へ1m付近に東西方向の落ち込みがあり、擾乱を反映すると考えられる。奥壁は右側壁側の底面が一部露出していることから、奥壁付近の床面は築造当初のレベルに近い可能性がある。いっぽうで、奥壁付近の床面には一部ビニールや空缶など現代の製品が露出している箇所があり、築造当初の床面より低いレベルにまで擾乱が及んでいることも考えられる。

つぎに壁体構造について触れる。玄室奥壁はまず巨大な一枚石を据える。その上に低平な石材を一石積み、天井石に至る。以上の二石はほぼ左側壁に接するが、右側壁との間には空隙があり、数個のやや小ぶりの石材を詰める。奥壁はほぼ直立する。

玄室両側壁は、右側壁で玄門寄りの上段に一部石材が脱落したと考えられる空隙がみられるものの、ほぼ全体が遺存する。左側壁に4石・右側壁に5石の基底石を据え、その上に面を揃えて徐々に持ち送りながら石材を積み、天井石へ至る。両側壁とも全体で4~5段に石を積んで構築する。基底石も含め、多くは横長の面を玄室に向ける。左側壁の基底石には大ぶりの石が用いられるが、上部の石にも基底石と比べて遜色のない規模の石が用いられる箇所がある。右側壁の基底石も、羨道からの流土により見えない部分を考慮しても他の石材と比べて必ずしも大ぶりの石材が用いられるわけではない。

玄室の天井石は5石で構成される。奥壁から2石はほぼレベルを同じくするが、3石目からは玄門へ向けて徐々に傾斜してレベルが下がる。もっとも玄門寄りの天井石は一段低く積まれ、

## 8 石室実測の成果

小壁をなし奥壁側からは前壁が二段になるようにも見える（図版3-(2)）。

つづいて羨道についてみていく。

羨道は、左側壁のもっとも羨門側の石が土圧または樹木の作用によりやや押されていることを考慮すれば、ほぼ主軸に沿う形で平行に伸びると考えられる。玄門部の袖石は現状で左側壁が一段、右側壁が二段で構成される。袖石より羨門側は、レベルを同じくする玄室側壁下段に比べやや小ぶりな石が用いられる。本来の床面に近いと考えられる玄室の奥壁付近に対し、羨道の現状の床面はレベルが著しく高いため、基底石の状態のほか、どの程度本来の姿を反映しているかも不明である。また現状よりさらに羨道が続いているかどうかは判断材料に乏しく、今後の調査が待たれる。

羨道部の天井石は玄室のもっとも玄門寄りの天井石から一段下がり、玄門部は前壁をなす。羨道部の天井石は現状では1石のみであり、羨門側から向って奥行87.5cm・幅130cm以上・高さ63cm以上を測る。

今回の測量調査によって明らかとなった石室の概要を述べると以上のようになる。これらの特徴からは標準型の規模をもつ、舟岩型の石室であると評価できよう（清家2006）。　（山本）

### 注

(1) 防空壕の可能性が考えられる。

### 参考文献

清家 章 2006「まとめと若干の考察」『南国市における大型後期古墳の調査』高知大学考古学調査研究報告第3冊 高知大学人文学部考古学研究室、高知：pp. 23-29

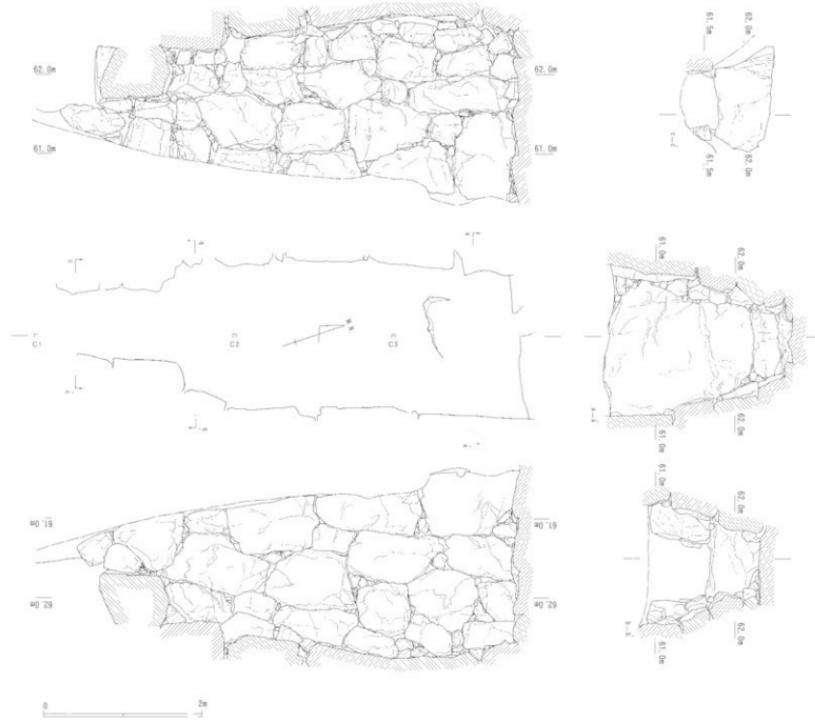


图7 石室实测图



### 第III章 まとめ

測量調査の結果、小倉山古墳は直径13m前後の円墳であろうと考えられた。最終的には発掘調査を待たねば確定できないが、この想定は大きくはずれることはないであろう。

横穴式石室は現状で石室全長5.96m・玄室長4.49m・玄室幅1.86m（奥壁付近）・1.60m（玄門付近）・玄室高2.40m（奥壁付近）の両袖式石室であることが明らかとなっている。畿内系横穴式石室によく似たいわゆる舟岩型の石室である（東1997・清家2010）。また、玄室面積約8m<sup>2</sup>という規模は筆者の石室分類では標準型にあたる（清家2006・清家2007）。

筆者の分析によれば、玄室面積10m<sup>2</sup>以上の大型の舟岩型石室は、河川や丘陵で区画される領域を治める地域首長の墓であり、玄室面積10m<sup>2</sup>未満の標準型石室は、地域首長の下にいる小首長墓である（清家2006・2007）。さらに、玄室面積14m<sup>2</sup>を超える特大型石室は、地域首長の上位にあって少なくとも高知平野を治める盟主的首長であろうと考えられる。この考えを香美市土佐山田町に適応させてみよう。土佐山田には特大型石室をもつと推測される伏原大塚古墳（土佐山田町1993）が小倉山古墳の400m南側に存在し、北西2.4kmの地点には大型石室墳の新改横走古墳（土佐山田町1979）がある（図2・図8）。これらと小倉山古墳の関係が問われるところである。図8は大型石室墳以上の古墳を地図上に落とし、ティセンボリゴンを作成したものである。小倉山古墳は伏原古墳を中心とした空間の中に位置する。小倉山古墳は伏原古墳被葬者

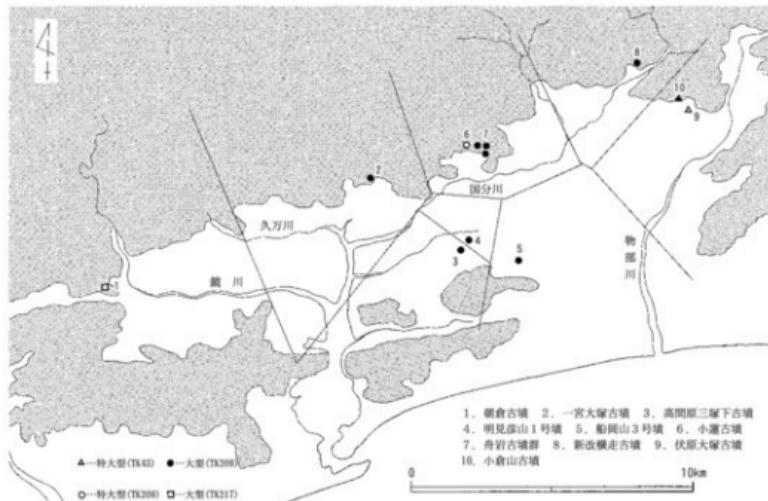


図8 特大型・大型石室の分布と小倉山古墳

の下にある小首長墳であるという単純な理解をすぐさまするわけにはいかない。伏原大塚古墳はTK43型式期に築造されTK217型式期まで追葬が続くようである（土佐山田町1993）。その一方で、国分川の北岸にある新改横走古墳がTK209型式期に築造される。伏原大塚古墳はTK43型式期には土佐山田のみならず高知平野全体の盟主墳であり、その後TK209型式期段階には高知平野の盟主的地位は南国市小蓮古墳に奪われるものの、伏原大塚古墳は追葬が続き、さらに新改横走古墳という大型石室墳が築造されるのである。小倉山古墳の時期は、出土須恵器が知られていないので詳細には決めてくいが、TK43型式期にさかのぼるとは考えにくい。おそらくTK209型式期の所産と考えられる。その場合、小倉山古墳の位置づけは伏原・新改両古墳との関係と深く関わってくる。すなわち、TK209型式期において、国分川を境にして新改横走古墳被葬者と伏原大塚古墳追葬者が土佐山田を分割して領域化しているのか、新改横走古墳被葬者が一括して土佐山田を差配しているかである。

前者の場合、伏原大塚古墳追葬者は領域首長として国分川より南の伏原・楠目一帯を差配しており、小倉山古墳被葬者はその下にある小首長として理解すればよいであろう。後者の場合は、土佐山田全体を統括する新改横走古墳の下にある小首長という理解が可能であろう。

上記のどちらにしても伏原大塚古墳被葬者と小倉山古墳被葬者の関係がさらに問われることになる。小倉山古墳は伏原大塚古墳次世代の古墳で指呼の距離にある。この2古墳の被葬者は直系あるいは傍系の血縁者であるのか、それとも血縁的には関係はないが、同じ集落に所属していたのか、異なる集落に所属していたのか興味はつきない。こうしたことが具体的に判明すれば、古墳時代の社会構造や支配構造とその変化が浮き彫りになるだけに重要な課題といえよう。現時点でこれらの問い合わせに対する回答は持ち合わせていないが、粘り強く調査を行うことでこうした課題に答えていきたい。

（清家）

#### 参考文献

- 東 潮 1997「大里2号墳をめぐる諸問題」「海南・大里2号墳発掘調査報告書」海南町教育委員会、徳島：pp. 66-83
- 清家 章 2006「まとめと若干の考察」高知大学考古学研究室編『南国市における大型後期古墳の調査』高知大学考古学調査研究報告第三冊 高知大学人文学部考古学研究室、高知：pp. 23-29
- 清家 章 2007「高知平野における大型後期古墳の動向」「考古学論究－小笠原好彦先生退任記念論集－」真陽社、京都：pp. 447-464
- 清家 章 2010「横穴式石室にみる南四国太平洋沿岸地域の関係」「弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係の研究」高知大学人文社会科学系、高知：pp. 131-143
- 土佐山田町教育委員会 1979『土佐山田町史』、高知
- 土佐山田町教育委員会 1993『伏原大塚古墳』土佐山田町埋蔵文化財調査報告書第14集、高知

## 図 版





(1) 古墳の立地 (▲の交差する箇所が古墳の位置)



(2) 墳丘 (東から)





(1) 墳丘（南から）



(2) 石室入口





(1) 玄室奥壁



(2) 玄門





(1) 右側壁



(2) 左側壁



【報告書抄録】

ふりがな	おぐらやまこふんそくりようちょうさほうこくしょ			
書名	小倉山古墳測量調査報告書			
副書名				
シリーズ名	高知大学考古学調査研究報告			
シリーズ番号	第11冊			
編著者名	高知大学人文学部考古学研究室（編者：清家 章）			
発行機関	高知大学人文学部考古学研究室			
所在地	高知市曙町2-5-1			
所収遺跡名	所在地			コード
			市町村	遺跡番号
小倉山古墳	高知県香美市土佐山田町楠目字小倉山			39212 190116
北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
33° 36' 45"	133° 41' 45"	110825~110906	0 m <sup>2</sup>	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
小倉山古墳	古墳	古墳時代	横穴式石室	墳丘測量、 石室実測調査

---

小倉山古墳測量調査報告書

—高知大学考古学調査研究報告第11冊—

2012年3月発行

編集 高知大学人文学部考古学研究室  
 発行 〒780-8520 高知市曙町2-5-1  
 印刷 有限会社 西村謹写堂

---

